

課題No.3

「持続的な生産へ向けたこねぎ栽培技術の向上」



- ・計画期間：令和2年度～令和3年度
- ・対象者：JA新みやぎ仙台小ねぎ部会（38人）

目標

○定性的目標

- 栽培技術が見える化され部会全体の安定生産技術が向上する。
- 病害虫対策や基礎技術の習得により、反収が向上する。

○定量的数値目標

- 販売数量

2. 7t/10a(R1) → 3. 2/10a(R2) → 3. 4t/10a(R3)

活動内容

①「栽培技術の見える化」による安定生産技術向上

- 熟練生産者(3人)の栽培技術(かん水や肥培管理等)の数値化
- 調査結果を見える化した資料による勉強会と意見交換

②病害虫防除及び基礎技術向上支援

【巡回や研修会での栽培支援, 情報提供】

巡回を通じて, 生産者の栽培上の課題把握とその改善を支援。

- かん水状況の確認
- 土壌物理性の改善
- 病害虫対策

①「栽培技術の見える化」による安定生産技術向上

- ・熟練生産者のほ場(3人)で、耕種概要やかん水管理の記録や、土壌水分、地温・pHなどのほ場環境データ測定や生育調査を実施。
- ・良質なこねぎ生産へ向けたモデル指標の検討が進んだ

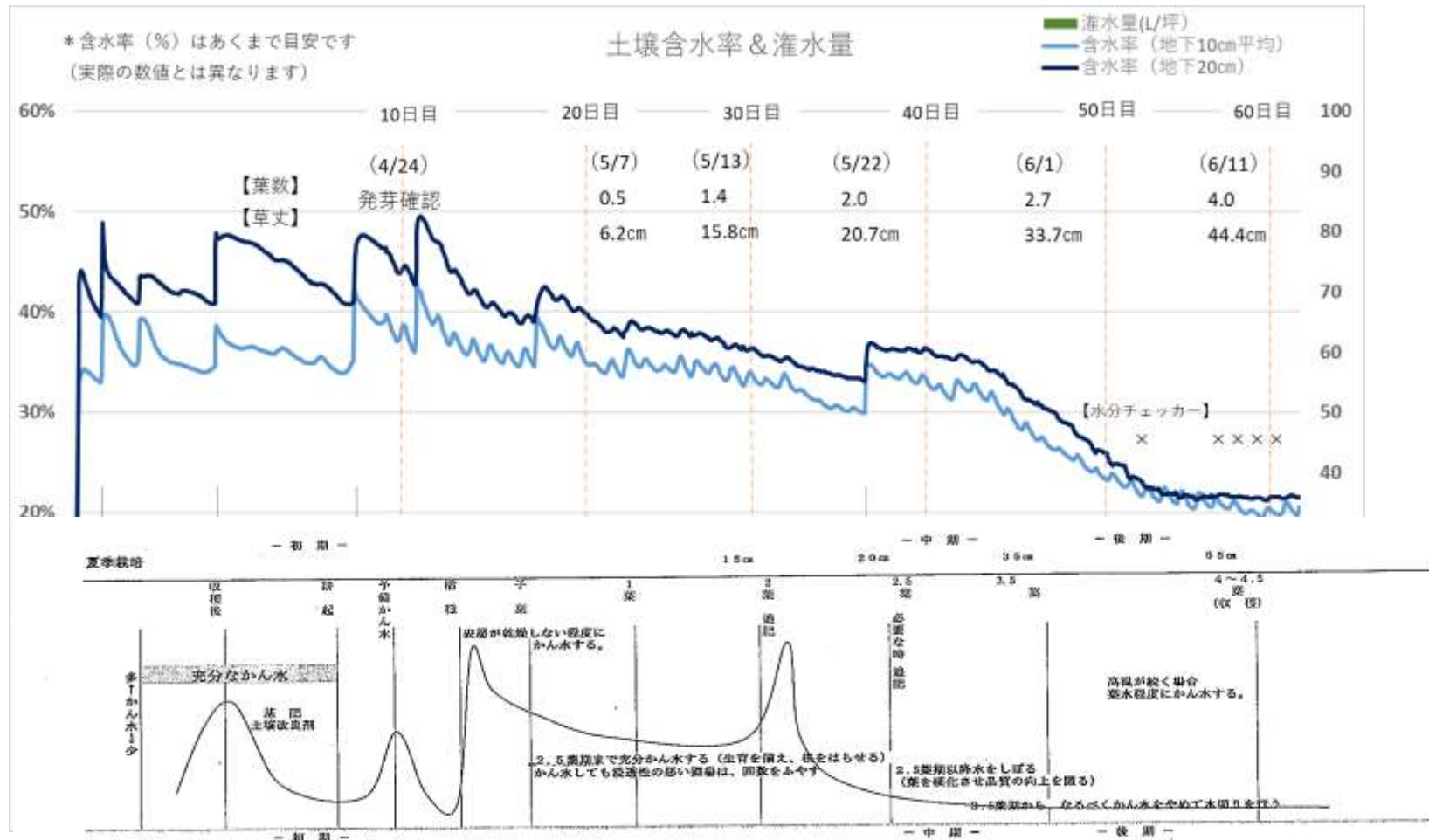


勉強会の様子



熟練生産者の栽培管理状況をグラフ・表にまとめ、勉強会を開催した。
各々生産者がハウス状況に応じて工夫をされていることが分かり、勉強会では他の生産者の管理状況を各々確認しあいながら、こねぎ栽培にはどのようなことが重要か(水管理のほか土づくりなど)について、活発に意見交換を行うことができた。

【収穫までの土壌水分率の推移と灌水タイミング】



- ・春～夏栽培のかん水のポイント: 播種から発芽まではかん水量を多くし、土壌含水率を高める。収穫期前には、かん水間隔を開けて、かん水量を減らしていく。
- ・熟練生産者は、こねぎ部会が従来から基本としていたかん水方法を基本に、かん水管理を実施しており、土壌含水率を計測することで実際に「見える化」することができた。

②病害虫防除及び基礎技術向上支援 【巡回・研修会での栽培支援, 情報提供】



JAの部会担当者と連携し、こねぎ生産者の巡回を実施した。
栽培上の課題と改善方法を生産者と一緒に検討して、生育改善の取り組みを進めている。
(課題: 病害虫の発生, かん水状況, 土壌物理性の改善など)

②一1 かん水状況の確認



病害が要因ではと推測されていた生育不良のほ場にて、かん水状況を確認したところ、他の生産者よりかん水量が少ないことが明らかとなった。

また、肥料成分の蓄積も判明し、生育改善へ向けて取り組みを行っている。

②ー2 土壤物理性の改善

作土層の土質が硬いほ場にて、土壤物理性改善の取り組みを行っている。

●きのこ廃菌床堆肥施用 * 検証中

●他作物栽培による改善試験

(エン麦・ハウレンソウ・深耕＋籾殻くん炭処理区)

* 次作のこねぎ生育まで経過を見る

「深耕＋籾殻くん炭こねぎ栽培区」は
「慣行こねぎ栽培区」よりも生育が良好の傾向



【他作物等栽培試験の様子】

②—3 病虫害対策

- ・「こねぎの病虫害一覧」や「防除薬剤一覧」の作成・配布
→ 生産者は主要な病虫害の特徴等を把握して、発生初期から適切な防除対策に取り組んでいる。

- ・萎凋病対策

現地の状況を確認し、病害診断や、
土壌消毒効果の確認等を行った。

- 効果的な対策について情報提供し、理解が深まった。



定量的数値目標(R2実績)

○定量的数値目標

販売数量

2. 7t/10a(R1) → 3. 2t/10a(R2) → 3. 4t/10a(R3)

(R2. 1月～12月)実績 2. 7t/10a

- 夏期の長雨・低温のちの高温による急激な気象条件の変化や秋期の長雨等の影響で、こねぎが軟弱徒長ぎみとなり、製品率及び製品収量が抑えられ、前年同等となった。

(収量向上へ向けて)

- 個々の生産者の収量増加のために、巡回等を通じてまずは、基本的な栽培管理の見直し&改善を図る。

* 来年度の活動予定(案) *

- 「栽培技術の見える化」実証ほでのデータ計測を継続し、若手生産者へのかん水管理等技術支援
- 巡回を通じて、個々の生産者毎が抱えている課題改善を支援
 - ハウス内のかん水状況や土壌環境等の確認
(チェックマニュアル作成・配布)
 - 土壌病害である萎凋病を含めた病害虫対策支援

ご清聴ありがとうございました